

JR学研都市線

ハイタッチ HAND BOOK

大阪の中心から木漏れ日が 差し込む森まで一本で

大阪の京橋駅から、東大阪・大東・四條畷・寝屋川・交野・枚方の6市、そして京都府に入り木津駅までを結ぶJR学研都市線。乗り換えなしで都心とつながるこの路線は、通勤や通学、買い物など、沿線に暮らす人の毎日に寄り添っています。

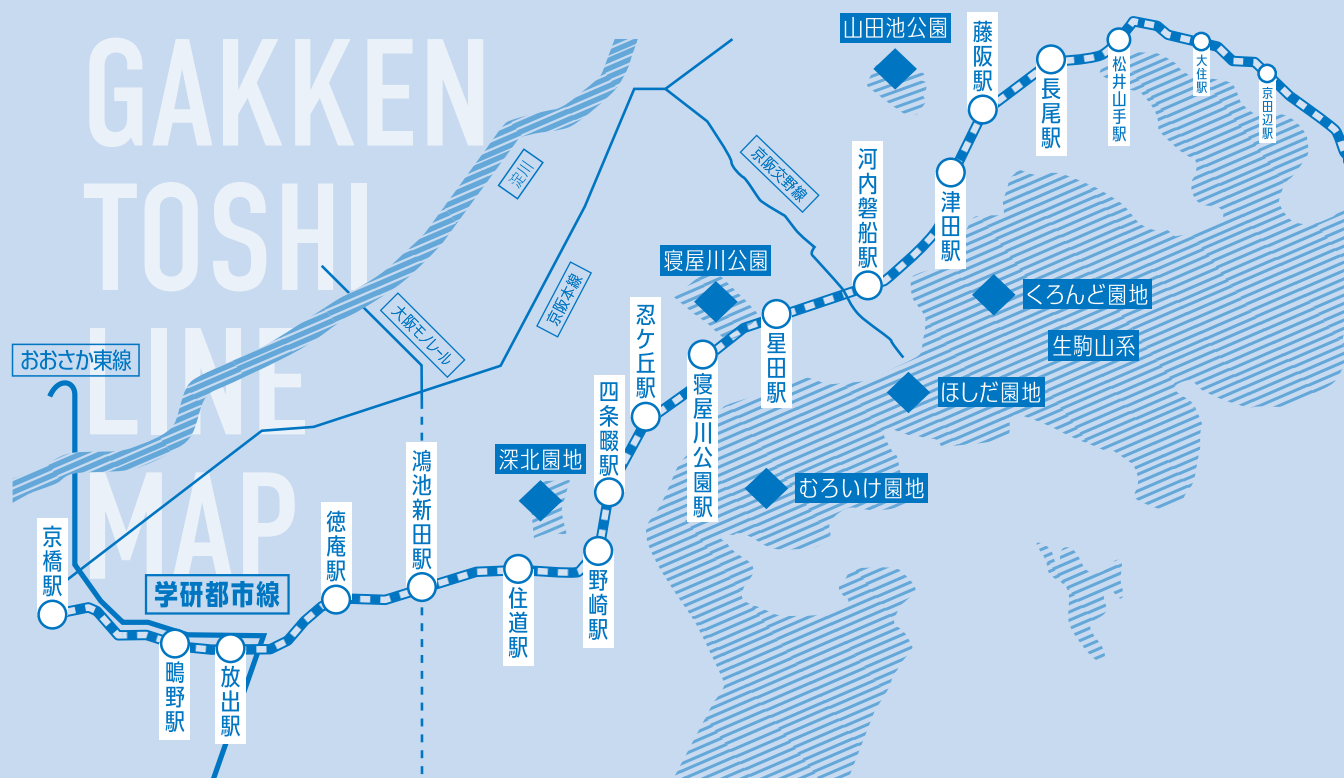
おおさか東線の開通で新大阪・大阪方面へアクセスしやすくなり、第二京阪道路の整備も進みました。これからさらに便利になっていく沿線として、今後は大阪モノレールの延伸や新名神高速道路の開通、松井山手付近への北陸新幹線新駅計画、そして、駅周辺の大規模なまちづくりも控えています。

一方で、学研都市線の車窓からは飯盛山や

交野山といった生駒山系の山並みが迫るのを見ることができます。また山田池公園・寝屋川公園・深北緑地という3つの府営公園や、大阪府民の森*などの自然公園も、各駅から近い距離にあるのが特徴です。駅のホームからまちへ出ると、みずみずしい緑がふと視界に入ってくる。この沿線で暮らす人にとって、豊かな自然は遠くに見えるものではなく、いつもすぐそばにあるものです。

都市の便利さと、心安らぐ自然。学研都市線は、その両方を兼ね備えています。

*府政100周年を記念して整備された「大阪府民の森」は、9つの園地からなる自然公園。学研都市線からは、ほしだ園地・くろんど園地・むろいけ園地へアクセスすることができ、ハイキングや自然観察など、年間を通じて自然体験の場として利用されている。



Introduction

- 01 大阪の中心から木漏れ日が差し込む森まで一本で
- 03 夢中であふれる沿線へ

Focus

- 05 子どもの夢中を、まちが育む
- 07 森が身近にあることの魅力

Voice

- 09 夢中与学研都市線が出会うとき
- 13 子どもから見た沿線の風景

Vision

- 15 学研都市線の合言葉、ハイタッチモード
- 17 あなたは、この沿線の何とハイタッチしますか？

夢中であふれる 沿線へ

A Line Full of Sparks

いま、まちの価値が、改めて問い直されています。その場所で過ごす時間が心地よいか、その土地ならではの魅力を感じられるか。目に見えない豊かさの重要性がどんどん高まっています。

国土交通省が示した、今後の市街地整備のあり方に関する事例集^{*1}は、機能を純化させた合理的な市街地から、多様な活動が展開される持続可能なまちへの転換を掲げています。また、新しい時代の都市再生の方向性に関する懇談会^{*2}においても、多様な主体が共創しながら画一化せずに固有の魅力を高めることで、人や投資を呼び込む都市の磁力が強まると示しています。

安全・安心を追求し高め続けることは、これまでもこれからもJR西日本グループとしての使命です。そのうえで、学研都市線の沿線であげたいのは、その先にある価値の提供。移動した先で出会う、心が動くそのまちならではのリアルで本物の体験です。

身近な自然も、都心からの近さも、この沿線が持つ確かな魅力です。けれど、森や駅、商店街といった一つひとつの要素は、日本中どこに

もあるものかもしれません。大切なのは、そこに誰かの「夢中」が掛け合わさること。夢中を持った人がその場所と出会い、新しいアイデアで見立てることで——例えば、豊かな森を幼稚園にするように——初めて、その場所でしか味わえない、特別な体験が生まれます。

そんな体験は、子どもから大人まで、心の中に新しい夢中を育ててくれます。夢中を持つ人が増え、その夢中がまた次の新しいアイデアを生んでいく。この循環が、学研都市線ならではの個性になっていくはずです。

この沿線をまるごと舞台に、ここに暮らす人、関わる人、そして外から訪れる人がどんどん混じり合い、何かに夢中になっていく。そんな風景をつくっていきたくと考えています。

*1 市街地整備2.0 新しいまちづくりの取り組み方（国土交通省 都市局 市街地整備課、国土交通省 住宅局 市街地建築課、2020年）

「空間」「機能」の確保を目的とした従来の開発から、「価値」「持続性」を高める複合的な更新へ。公民連携でビジョンを共有し、多様な手法・取組を組み合わせ、エリアの価値と持続可能性を高める、まちづくりの考え方。

*2 都市の個性の確立と質や価値の向上に関する懇談会 中間取りまとめ 成熟社会の共感都市再生ビジョン（国土交通省 都市局 まちづくり推進課、2025年）成熟社会における持続可能な都市再生の方向性を提示。経済と公共の価値の両立、既存ストック活用、可変性を持たせる余白の創出を柱に、人々の共感を呼び込む多世代共創のインクルーシブなまちづくりを提示している。

Cultivation

新しい夢中が育つ

Experience

リアルで本物の
体験が生まれる

Encounter

沿線の資源と
出会う

Spark

夢中からはじまる

学研都市線の魅力を高める
High Touch Spiral

子どもの夢中を、 まちが育む

夢中であふれる沿線をめざすうえで大切な視点はなにか？

子どもの育ちとまちづくりを研究・実践する

横浜市立大学の三輪律江教授に、これからのまちづくりのヒントを聞きました。

子どもたちが教えてくれた、 まちの価値

— 三輪先生は、どのようなきっかけで「子どもとまち」の関係に関心を持たれたのでしょうか？

もともとは建築家 仙田満氏の研究室で、子どもの遊び環境を研究していました。当時の都市計画はいわゆる「元気な働く男性」を前提に作られていて、子どもや女性、弱い立場の人の視点が欠けていることに違和感を覚えていたんです。その違和感が確信に変わったのが、横浜・和田町の商店街活性プロジェクトでした。「商店街の活性化に子どもなんて関係ない」という空気のなか、子どもの行動調査を行いました。すると、子どもたちはお金を落とすわけではないけれど、本屋や文房具屋が居場所となっていること、遊び場ではないのにそれを許容している商店街の存在が見えてきたんです。

この調査結果を商店街の人たちに伝え、と、「お金を使う人だけが、まちのファンではない」と目線が変わってくるわけですね。それから子どもにとっての商店街を中心としたまちを考えるプロジェクトが立ち上がり、子どもたちとまち探検をしたり、お祭りを一緒につくるようになっていく。子どもたちがまちの一員となって市民権を得ていくプロセスに関わった経験が、まちづくりに子どもが参画する可能性に目を向ける大きなきっかけになりました。

まちを知り、 まちに関わる機会をつくる

— これからのまちづくりを考えるうえで、私たちはどのような目線を持つべきでしょうか。

大切なのは「子育て環境」ではなく、「子育て環境」という視点です。子育て環境とは、子どもの育ちのすべてのライフステージにまちとの関わりが生み出されているかということ。子育て支援となると保護者や乳幼児のみにフォーカスしがちですが、その先のどの世代においても、子どもたちが自らの意思で、自分の暮らすまちを自由に闊歩し、まちでの出会いをつないで関係性を広げていけることも重要です。

乳幼児期の親子は様々な制約の中で「近さ」を求めるため、自宅から半径300メートルほどのものすごく狭い範囲が身近な行動圏となり、その中で社会を体験して生きています。その後、成長に伴って子どもの活動範囲は広がっていきませんが、乳幼児期から変わらず大切なのは「まちを知り、まちに関わる機会」です。子どもたちは家と学校の行き来だけでは健全な成長はできませんよね。家庭や学校だけでなく、子どもが自らの意志で居場所となる場を選択し、自ら獲得していくことが必要です。

地域の人に見守られたと実感したり、おさんぽなどを通して、自分が暮らすまちと関わった記憶を持つ子どもは、大人になったときに「そうい

ば昔、こういう場所でこんな風に遊んだな」と、過去の記憶と現在の生活圏が重なっていきます。この原体験があれば、将来進学や就職で一度まちを離れ、まったく違う土地で暮らすことになったとしても、自分が親になったときに「あのような環境で子育てをしたい」と思えるようになります。たとえ頼れる親族が近くにいなくても、地域の人に自然とSOSを出して、安心して子育てができるようになります。単に塾などのサービスが充実しているという小手先の話ではなく「安心してこのまちだったら子育てできる。うちの子もしっかり育てていく」。そう思えるかどうか、これからのまちづくりにおいてすごく大事なんじゃないかと思います。

子どもの「移動の自由」を広げ、 沿線をまるごと居場所にする

— 「沿線」という、より広いエリアでの子育て環境についてどう思われますか？

以前、とある路線の検討委員会で「駅まで、そして駅からも子どもたちが自分の足で移動できるか」という視点を提示しました。特に地方や郊外では、子どもが親の車の送迎なしにはどこにも動けないことが大きな課題だと思っています。たとえば、子どもがICカードを使って気軽に隣の駅へ移動できる環境があれば、子どもの行動圏はぐっと広がり、それが「まちを知り、まちに関わる機会」にもつながります。各駅をどこも同じような機能で画一化するのではなく、駅ごとに異なる役割を持たせながら、子どもがのびのびと動き回れるエリアを作っていく。そんな風に、保護者が安心して子どもたちをリリースしようと思える環境の中で、子どもたちの意志での移動の自由度を上げていく視点がとても大切です。

昨今、民間企業による子育て支援サービスが増えています。利便性は高くても、子どもの視点から見ると生活と断絶している「親目線のサービス」になっている面があるなど悩ましく思っています。子ども目線で本当に豊かなのは、例えば、保育園で子どもたちが大好きないつものおやつを買っている和菓子屋さんがある、「自分たち

で作ってみたいから、あの和菓子屋さんに教えてもらいに行こう！」というような体験です。あまり作り込みすぎない自然発生的な関わりが大切ではないでしょうか。

まちづくりに関わる私たちが意識すべきなのは、最初から目標を設定しすぎないこと。そもそも、こうした取り組みをサービスだけにしては、ダメですね。あまり整えすぎるとお客様感覚になって自分たちで工夫する力がつかない。自分たちでまちを育てていく意識が大切だと考えています。

— 移動の自由とまちにあそびがあるからこそ、自分たちの力で沿線に「夢中」を見つけていけるのかもしれない。今日はありがとうございました。



三輪 律江 横浜市立大学 国際教養学部／大学院 都市社会文化研究科 教授
専門は建築・都市計画、参画型まちづくり、子どものための都市環境。博士（工学）。「子ども」と「まち」の関係に着目した実践的調査研究を数多く手掛け、複数の自治体で都市計画審議会委員や子育て支援 NPO の理事等も務める。代表著書に『まち保育のススム』『孤立する都市、つながるまち』がある。

森が身近に あることの魅力

まちでどんな経験をして、どんな景色を見て過ごしたか——。そうした一つひとつの記憶が、子どもの豊かな感性や生きる力を育んでいきます。けれどいま、スマホや画面の前で過ごす時間が増え、土に触れたり、季節の移り変わりに気づいたりする機会が、日常から遠ざかっています。でも、学研都市線なら、そんなかけがえのない体験がもっと身近になるかもしれません。そのきっかけのひとつが「大阪府民の森」です。大阪府東・南部に広がる9つの個性豊かな自然公園の総称で、ハイキングコースやキャンプ場、大きな吊り橋など、自然を身近に感じられるスポットがたくさん。そんな豊かな森が暮らしのすぐそばにある魅力について、「大阪府民の森」統括所長の柏本優介さんにお話を聞きました。



森は人を育てる
最高の教材です。

森がすぐそばにあることで、育まれるもの

都会の中で暮らしていると、自然と触れ合うのは「特別なお休みの日だけ」になってしまいがちです。けれど学研都市線には、暮らしのすぐ隣に、いつでも訪れることのできる森があります。そのひとつが、気軽に自然を体感できる場所として親しまれている「ほしだ園地」です。この森を管理している柏本さんが口にされていたのは「まずはここへ来て、体いっぱい感じてほしい」という言葉でした。森の空気の匂いや、季節の移ろい、雨上がりの葉っぱできらきら光る水滴——。そんな日々のささやかな美しさに気づき、心が動かされる感覚は、ありのままの自然の中でこそ育まれるといいます。また、柏本さんが大切にされているのは、親子で一緒に何かを楽しむこと。「ノコギリを使うお父さんを初めて見た小学生がかっこいい！って目を輝かせていたんです」と柏本さん。上手じゃなくてもいい。ただ一生懸命チャレンジしている親の背中を見るだけで、子どもは心から

尊敬し、大きな刺激を受けます。子育てに正解はないけれど、そんな瞬間の積み重ねこそが、子どもたちの生き生きとした自信を育てていく——。そう信じて、柏本さんは親子と一緒に輝けるきっかけづくりを日々の仕事の中で意識しています。「森と仲良くなる入口は、なんだっていいですよ」と柏本さんは話します。本格的なアクティビティはもちろん、いつものお散歩でもいい。森に入って鳥のさえずりに耳を澄ましたり、季節の草花を見つけたり、自然を肌で感じる。そんな時間を毎日の暮らしの中にそっと取り込んでいくことで育まれる心の豊かさが、森が暮らしのすぐそばにあることの魅力なのかもしれません。

柏本 優介 大阪府民の森 統括所長
道の駅施設長、青少年指導員、児童養護施設の自立支援など多彩なキャリアを経て、2022年より住友林業緑化に入社。大阪府民の森の指定管理を担う統括所長として、ほしだ・むろいけ・くろんど・なるかわの各園地を管轄する。また自身の活動として農と食と体験を掛け合わせた教育活動も展開している。

夢中と学研都市線が 出会うとき

学研都市線と、胸に夢中を秘めた人が出会ったとき、
どんな未来が生まれるのでしょうか。
この沿線でそれぞれの夢中をかたちにしてきた
お二人の実践をお届けします。



幸脇 啓子
株式会社あすいく
代表取締役

NHK、文藝春秋などでの勤務を経て、出産・育児をきっかけに起業。「ママが笑えば、子どもも笑う」をビジョンに、一時保育の検索・予約サービス「あすいく」を2019年リリース。その後、JR東日本・西武鉄道など各社と連携し、託児中に子どもが“ホンモノ体験”できる「体験型保育」を2023年にスタート。3児の母。

“ホンモノ”には、
言葉にできなくても
伝わる圧倒的なパワーがある。

CASE1:あすいく

あすいくが届ける “ホンモノ”とは？

#駅員の日常が子どもには冒険になる
#子どもの笑顔が罪恶感をほどく

一時保育のマッチングや体験型保育イベントを手がける株式会社あすいくの幸脇啓子さん。子育てをする親の大切な時間を生み出すだけでなく、企業とタッグを組んで、子どもたちが心からワクワクする“ホンモノ”の体験を届けています。

子育ての経験から見てきた、 親ごころのハードル

—— 体験型保育を始めたきっかけを教えてください。

子どもを預けることに罪恶感を感じる親って、本当に多くて。まさに、私もそうでした。もっと仕事したい、自分の時間が欲しい。でも、自分のために子どもを預けることが、いけないことのように感じてしまう。その気持ちは、いくら言葉で「親が一人の時間を取ることも大切だから」と言われてもなかなか消えないものです。じゃあ、どうしたら心が軽くなるかというと、親子が離れて過ごした後に、子どもが「ただいま！」と笑顔で帰ってきてくれた瞬間なんですよ。親が自分らしく過ごす時間をつくることは、巡り巡って子どもにとっても最高の環境になります。親と子のウェルビーイングはつながっているもの。だから「喜んで預けたくなる保育」をかたちにしたかったんです。

“ホンモノ”に触れる時間が、 子どもの確かな自信に

—— 幸脇さんが大切にしている“ホンモノ”とは、どんな体験ですか？

分かりやすいのが、鉄道会社と一緒に開催している「駅いく」です。子どもたちにとって、普段は見られない駅員さんの仕事の舞台裏は驚きの連続。親と離れて好きな世界にたっぷり入り、感じたことを友達と目を輝かせておしゃべりする。そんな濃密な時間を過ごすので、お迎えに行ったら子どもから話を聞き、成長を実感したという声がとても多いんです。始まりは2023年秋、JR東日本と上野駅をまるごと保育園にした企画でした。駅員さんには「いつも通りに働いてください」とお願いしたんです。大人にとっての「いつもの日常」は、子どもにとっては特別な冒険だから。駅員さんの一挙手一投足に目を輝かせる、そんな“ホンモノ”との出会いが、子どもの心を育ててくれます。

子どもたちが夢中になる姿が、 この沿線の日常になっていく

—— 学研都市線では、どのような取り組みをされていますか？

四条畷駅で、関西初となるJR西日本との「駅いく」をスタートしました。大きなターミナル駅ではなく、身近なまちの駅で開催できたことが、本当に良かったです。子どもたちが駅のなかを探検しているときも、「楽しそうね」と地域みなさんに声をかけられたりして、まちのあたたかさを感じました。沿線外から「初めて学研都市線に乗りました」とわざわざ来てくださり、子どもが「駅いく」に参加している間に夫婦で散歩を楽しみ、このまちを気に入ったと言って帰っていく方も。私が常々思い描いているのは、我が子だけでなく、たくさんの子どもの何かが夢中になっている姿をみんなで見守る風景。この学研都市線なら、そんな景色がこれからたくさん見られる気がしています。

CASE2:もりねき書店

もりねき書店が 実践する “みんなと一緒に”とは？

#未完成さが人を巻き込む
#楽しさが続ける力になる

四条畷駅の近くにある「もりねき書店」。プリコリープの竹中雄一さんを中心に、学生たちがDIYで内装を手がけてオープンしました。地域の憩いの場であり、子どもたちの学び舎、そして学生と企業がつながるブック&カフェとして親しまれています。

お店と一緒に、 売り場を作っていた会社員時代

—— もともと竹中さんはどのようなお仕事をされていたのでしょうか？

ここmorineki*にテナントとして入っているアパレル会社の社員でした。営業部門の責任者を務めていたのですが、実はその経験が、いまにつながっています。大切にしていたのは「お店の方々と一緒に売り場を作っていく」こと。通常、アパレルだと服屋のバイヤーさんに売るのが常識なのですが、私は自分たちのお客さんが来るところならアパレル売り場じゃなくてもいいと、異業種のお店に提案していました。服を扱っていないお店だからこそ、互いのいいところを掛け合わせたら、きっと新しい世界が生まれるはず。そう信じて、多種多様なお店に「一緒にやりませんか？」と声を掛けていました。

*morineki：大東市が「大東公民連携まちづくり事業株式会社（コーミン）」とともに、全国初のPPP（公民連携）手法で市営住宅跡地を再生した、四条畷駅近くの複合エリアの名称。

みんなでつくる新しい本屋が、 次の夢中が生まれる場所に

—— 今のもりねき書店をオープンするきっかけを教えてください。

勤めていた会社がこのエリアに移転することになり、私が移転プロジェクトの担当者として動き出しました。活動の中で、市の方や建設・まちづくりに関わる方々とやり取りを重ねるうちに気づいたんです。ここは単にモノを売るための場所ではなく、人が集まって言葉を交わし、そのつながりの先にモノが売れていくんだな、と。その体験がなければ、もりねき書店は生まれませんでした。エリア内の空き家を活かして、きれいなお店を作るより、みんなで作上げていく方が絶対に面白い！そこで近畿大学建築学部の学生団体「あきばこ家」の学生たち、四條畷学園高校の生徒さん、そして地域の子供たちが主役になり、学びながら完成させたのがこのもりねき書店です。

書店作りで気づいた、 “学生”という学研都市線の可能性

—— もりねき書店にはこれからどのような可能性がありますか？

ここは、改めて若い人たちがのびのびと育ち、活躍できる場所なんだと実感していまや15以上の大学から学生が集まっていて、企業の課題解決やイベント企画など、たくさんのプロジェクトが進行中です。参加する学生たちの最初の動機は、「まちを良くしよう」ではなく、「ここに関わると自分が成長できそう！」というシンプルなもの。でも、それでいいし、それが一番大事なんです。学生が成長することが、結果的にまちを良くしていますからね。私自身も、大きな目標を掲げるというより、自分が楽しいかどうかを何より大切にしています。みんなで取り組むことで、関わる一人ひとりが「楽しい」「成長できる」と実感できるかどうか、何より重要なんだと思います。



自分に嘘をついて
しんどい思いをするより、
大変なことも面白がって、
心も体も健康でいることが
何より大切です。



竹中 雄一
プリコリープ代表
大阪産業大学 特任講師

株式会社ノースオブジェクト
常務取締役を経て2023年に独立。もりねき企画を設立し、同年10月に四条畷駅近くにブック&カフェ「もりねき書店」をオープン。産学連携アドバイザーとして学生と企業をつなぐ地域コミュニティづくりに取り組む。2025年より大阪産業大学経営学部特任講師。

Children's Perspective

子どもから見た
沿線の風景

四條畷学園中学校の生徒たちと「わがまちことばワークショップ」を実施しました。大人になっても忘れたくないこのまちの思い出を書き出し、そこから誰かへの問いをつくるというものです。唐揚げの匂い、夏の夜の風、商店街のいつものお店。日常の記憶を言葉にしながら、まちへの問いを自分の手で言葉にしていきました。生徒たちの言葉から生まれた、5つの問いをご紹介します。



あなたは、夏の夜の風の涼しさをおぼえていますか？

暑いはずの夏の夜に、ふと頬をなでる風の涼しさ。家族とアイスを買いにコンビニへ歩いた、あの夜道の感触。誰かと共有したわけでもないのに、忘れられない記憶がある。



あなたが「いきます」「いってらっしゃい」を言いたい人は誰ですか。

毎日すれ違う駅員さんに、まるで近所さんのように声をかける。そんな何気ない挨拶が、まちとの距離を縮める。



最近、誰とからあげを食べましたか？

家に帰ってドアを開けた瞬間、漂ってくる唐揚げの匂い。その記憶は、実家にいるうちは当たり前すぎて気づかない。いつかこのまちを離れ、帰ってきたとき、ふとあの匂いを思い出すかもしれない。



あなたが商店街でついつい見てしまうお店は何ですか。

お母さんと一緒に訪れた魚屋さん。ショーケースに並ぶ魚のパックに貼られた「今日はこれ」というシール。何が並んでいるのか気になって、通るたびにちょっと立ち止まってしまう。



あなたは、まちなかの人の声を聞くことができますか？

電車で隣り合う人、公園で遊ぶ子ども。毎日そこにいるはずの音が、聞こえていないかもしれない。まちの音に耳を澄ますことで、はじめて見えてくるものがある。

四條畷学園中学校 ナイスガイズ

2026年に創立100周年を迎えた学校法人四條畷学園。「学ぶ喜びをずっと」を掲げる同学園で、中学1年生から3年生まで約40名で構成される広報部隊「ナイスガイズ」。学校の魅力を自ら発信するだけでなく、地域の環境基本計画の策定にも参加するなど、多彩な活動を行っている。

ワークショップ企画運営 山月智浩

学研都市線の合言葉、 ハイタッチモード

夢中を持つ人が、この沿線にある何気ない魅力と出会い、JR西日本とともに新しい価値を生み出していくこと。私たちはそんな出会いを、「ハイタッチ」と呼ぶことにしました。

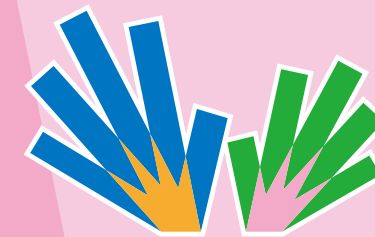
リアルな移動を支える鉄道会社だからこそ、この沿線で、人と人、人とまち、人と自然が出会うきっかけをたくさん作っていくことができると考えています。そして、沿線内外を問

わず、地域や社会の課題に向き合う人や企業、自治体と一緒に共創を進めていく合言葉として、「ハイタッチモード」を掲げていきます。

この合言葉のもと、地域の資源に新しい光を当てながら、毎日の暮らしを健やかに彩る「親と子のウェルビーイング」と、心動かすリアルな体験を通した「学びと成長」の2つのテーマで、たくさんのハイタッチを起こしていきます。

What is ハイタッチモード？

都市と自然と夢中が交わる学研都市線へ



ハイタッチモード

何かに夢中になれるということ。そのことを誰かと分かち合えるということ。
子どもも大人もみんないい顔して、いつまでもキラキラしながら過ごせるように。
住んでいるまちやそれぞれの立場を超え、ひとりの子どもとして、ひとりの大人として
色々なこととハイタッチし、色々な人とハイタッチできる沿線をめざします。

それが、ハイタッチモード。
そんな明るい未来が、都市と自然と夢中が交わる学研都市線で始まります。

ハイタッチモードの3ステップ



夢中と出会う

「なぜ、これをやりたいんだろう？」毎日の暮らしの中で感じた小さな気づきや、心から「楽しい！」と思えるピュアな気持ち。すべてのハイタッチは、そんな、あなたの中に灯ったひとつの夢中から始まります。



沿線と掛け合わせる

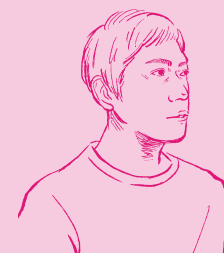
森、駅、商店街、そこに暮らす人の営み。この沿線には、新しいアイデアとの出会いを待つものがたくさんあります。あなたの夢中を、このまちの資源と掛け合わせてみる。何が生まれるかは、掛け合わせてみるまでわかりません。



広げ、広がる

誰かと一緒に一步を踏み出すと、ひとりでは見えなかった景色がどんどん広がっていきます。仲間が増え、場所が開かれ、その楽しそうな様子がまた次の誰かを動かしていく。関わる人が増えるほど、未来は思いがけないかたちに育っていきます。

JR西日本による編集後記

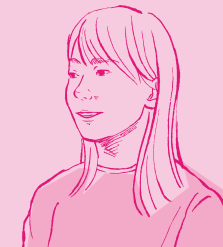


取材にご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。夢中を持つその人その場所だからこそできるリアルで本物の体験。その一つひとつが次のひとりの心を動かし、沿線いっぱい夢中があふれる。そんなハイタッチモードを広げる仕事にこれからも携わっていきたいと思っています。

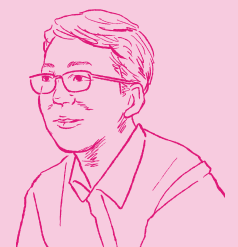


鉄道会社の強みは、点と点を線でつなぎ、人や地域をつなげられること。ハイタッチモードという言葉を通して、沿線のさまざまな場所に夢中になれるきっかけを増やしていきたいです。そのためには自分自身が「面白そう」「やってみたい」という気持ちを大切にしながら、そうしたきっかけを生み出せるよう考え続けていきたいと思っています。

既にこの沿線にある自然や資源、人々の暮らしを生かすことで、この沿線らしさは自然とにじみ出てくると感じています。住む人も、関わる人も、これから関わる人も、魅力に気づき様々な学びを得られる、そんな沿線をめざしたいです。



学研都市線で始まっている「夢中」の景色を、多くの人に実際に確かめて来てもらいたい。新しい「夢中」を、一緒に考えていきたいです。



発行
企画・編集
編集・ライティング
デザイン
写真

西日本旅客鉄道株式会社
株式会社ロフトワーク
かたちラボ 田中裕一
株式会社 Hil Design
三田周 (表紙、裏表紙、1~4 頁、7~8 頁、11~12 頁)
山月智浩 (13~14 頁)

発行日
2026年10月21日

©2026 West Japan Railway Company.
All Rights Reserved.
本誌の無断転載・複製を禁じます。

あなたは、この沿線の 何とハイタッチしますか？

学研都市線では、すでに夢中を持った人たちが活動しています。森を守り育てるフォレスター、体験型保育を広げる起業家、書店を新しい挑戦の場にする産学連携アドバイザー、そして駅での仕事体験に目を輝かせる子どもたち。それぞれが、自分の夢中をこの沿線に持ち寄っています。JR西日本もその一員として、取り組みをひとつずつ進めているところです。

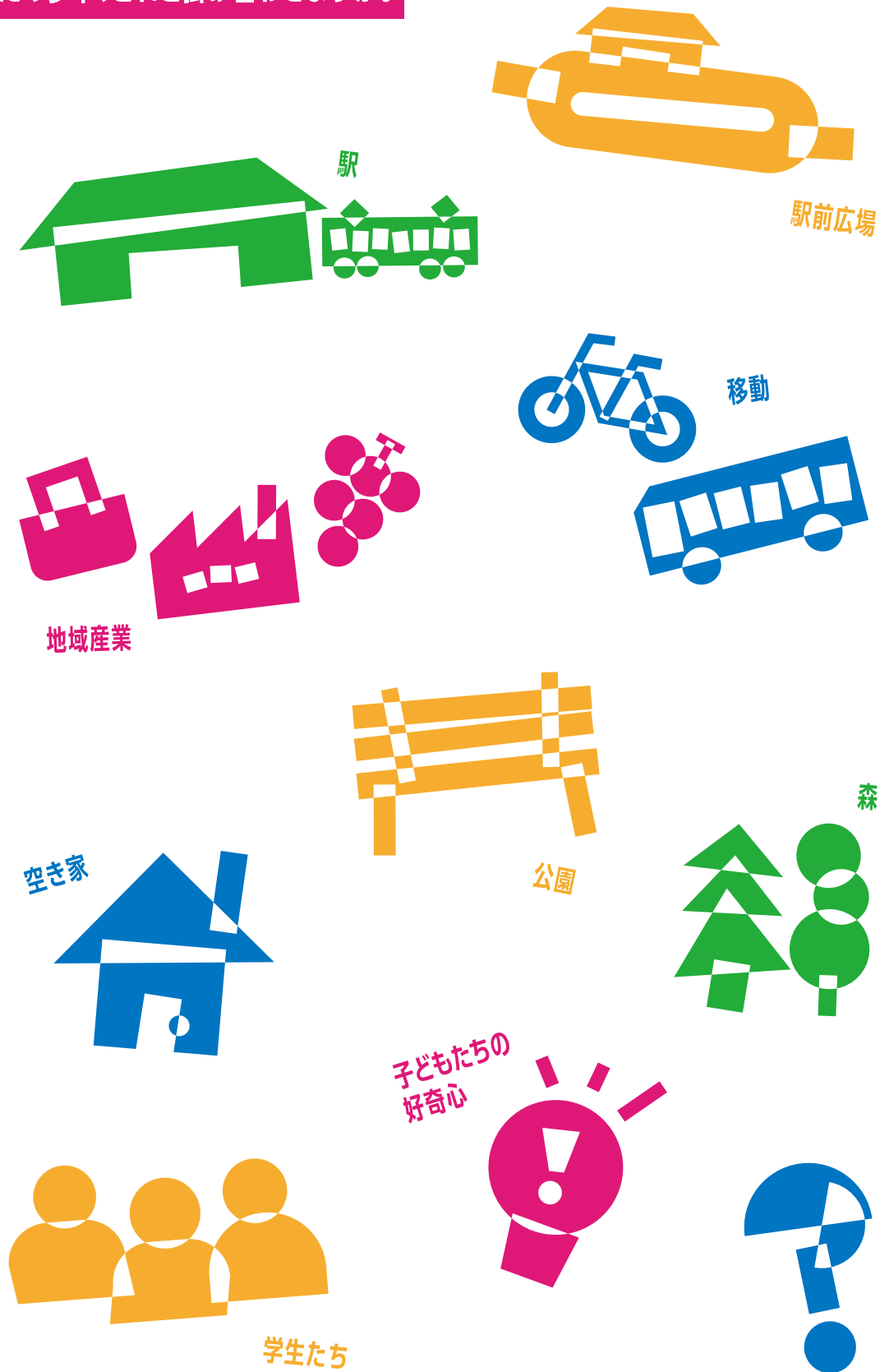
都心からのアクセスの良さや、多様な世代がここで築いてきた暮らしのあたたかみも、こうした新しい一歩を後押ししてくれています。

10年後、この沿線がどんな風景になっているかは、まだ誰にもわかりません。けれど、夢中を持った人たちが集まる場所は、きっと、面白くて心地よい場所になっているはずです。

ハイタッチモードは、JR西日本だけでつくれるものではありません。この沿線で何かに夢中になっているすべての人、そしてこれから出会う人たちと一緒につくっていきたいと思っています。

ぜひ、あなたの夢中を教えてくださいませんか？

あなたの夢中、どれと掛け合わせますか。



CASE 1 駅いくin 四条駅

パートナー：株式会社あすいく



四条駅駅舎の「ホンモノ」のお仕事体験と保育を組み合わせた、体験型一時保育プログラムを企画しています。休日に保育士が子どもをお預かりして特別な駅のお仕事体験を提供するとともに、その間、親は自由な時間を過ごすことができます。



CASE 2 星田駅のリニューアル



2028年春頃の完成を目指して星田駅のリニューアルを計画。子どもも大人も快適に過ごせる待合空間の整備や、子ども達の地域への愛着を育む取り組みを今後検討していきます。



CASE 3 忍ヶ丘駅アートプロジェクト

パートナー：絵本作家谷口智則さん・四條駅市



四條駅市PR大使で絵本作家の谷口智則さん、四條駅市とともに、駅舎でのアート展示やまちなかのアートを巡るイベントなど、子どもたちの日常にアートとの出会いを増やす取り組みをしています。



CASE 4 奥ひら里山ツーリズム

パートナー：奥ひら実行委員会・枚方市



枚方市東部エリア「奥ひら」の里山や自然の魅力を発信する奥ひら実行委員会、枚方市とともに、自然・暮らし・人をつなぐ親子で楽しめる里山ツーリズムのコンテンツ造成を行っています。



Others JR学研都市線沿線まちづくり協議会

大阪都市計画局、枚方市、交野市、寝屋川市、四條駅市、大東市、東大阪市とともに、持続的なまちづくりを通じて沿線地域の活性化や課題解決を図るため、JR学研都市線沿線まちづくり協議会を設立し、沿線一体のまちづくりに取り組んでいます。